周防大島町 第４分科会

過疎地域自立活性化優良事例発表会

歓迎挨拶

椎木　巧（しいき たくみ）
周防大島町長

コーディネーター

図司 直也（ずし なおや）
法政大学現代福祉学部教授

過疎地域自立活性化優良事例発表団体

周防大島町（山口県周防大島町）
周防大島には理想の「島暮らし」がある
～「ひと」や「しごと」の流れを「定住」に繋げる！～

企業組合くれば（静岡県島田市）
ウエルカムささま　～ササマックスプロジェクト～

青河自治振興会（広島県三次市）
『こころ　あたたまるふるさと　あおが』
～持続的な住民主体のまちづくりへの挑戦～

梶並地区活性化推進委員会（岡山県美作市）
「移住者の力」を「地域の力」に
～地域団体による移住者の積極的受入れを軸とした地域活力づくり～

過疎地域自立活性化優良事例発表会

周防大島町（山口県周防大島町）

周防大島には理想の「島暮らし」がある
～「ひと」や「しごと」の流れを「定住」に繋げる！～

基幹産業である農業や漁業と観光交流を結びつけた体験型修学旅行の受入数は県内最多であり、農業・漁業の担い手がホームステイの受入家庭や体験のインストラクターとして活躍するなど、地域間交流や世代間交流が地域活性化につながっている。また、定住相談窓口となる「周防大島定住促進協議会」の設置や、一泊二日の島暮らし体験を提供する「島時々半島ツアー」の開催など、多様な定住促進活動を行っている。

企業組合くれば（静岡県島田市）

ウエルカムささま　～ササマックスプロジェクト～

地域資源を活かしながら住民全体でアーティストインレジデンスを実施することで、定住・交流人口の増加、地域への経済的効果を高めている。国際陶芸祭やアーティストインレジデンスの取組では、地域住民と陶芸家、来場者との交流を通じて地域に活気をもたらしており、また、地元食材を利用した加工販売施設の開設により、女性やお年寄りの活躍の場を創出している。

青河自治振興会（広島県三次市）

『こころ　あたたまるふるさと　あおが』
～持続的な住民主体のまちづくりへの挑戦～

子どもは地域の宝との考えの下、「農」を中心とした田舎文化と都市の交流を目標に掲げ、青河自治振興会が中心となって、住民主体で地域の暮らしを守り、都市農村交流の推進に向けた活動を展開している。また、「有限会社ブルーリバー」による定住促進対策事業や「合同会社あおが」による農家レストランの運営など、様々な地域運営の手法により地域活性化に取り組んでいる。

梶並地区活性化推進委員会（岡山県美作市）

「移住者の力」を「地域の力」に
～地域団体による移住者の積極的受入れを軸とした地域活力づくり～

人口減少や高齢化の進行等により、地域活力の低下や、空き家の急増、地区内の小学校の閉校等の地域課題を踏まえ、「お試し住宅」の管理、入居者へのサポート、入居期間終了後の空き家の紹介等を住民自らが行うことで、梶並地区への移住者を増やすとともに、移住者等を地域行事や特産品づくり等の地域づくり活動に巻き込み、その力を地域力の向上に役立てている。

現地視察

○ 瀬戸内ジャムズガーデン

○ 道の駅サザンセトとうわ

過疎地域自立活性化優良事例発表会

周防大島町（山口県周防大島町）
周防大島には理想の「島暮らし」がある
～「ひと」や「しごと」の流れを「定住」に繋げる！

企業組合くれば（静岡県島田市）
ウエルカムささま　～ササマックスプロジェクト～

青河自治振興会（広島県三次市）
「こころ　あたたまるふるさと　あおが」
～持続的な住民主体のまちづくりへの挑戦～

梶並地区活性化推進委員会（岡山県美作市）
「移住者の力」を「地域の力」に
～地域団体による移住者の積極的受入れを軸とした地域活力づくり～

歓迎挨拶

周防大島町長
椎木　巧氏（しいき　たくみ）

皆さん、おはようございます。皆さん、ようこそと歓迎のご挨拶を申し上げるつもりでしたが、ご存知のように人災で、のちほどまた説明させていただきたいと思いますが、私たちの周防大島町は唯一の、すべてのラインが通っております大島大橋に2万5千トン、180メートルの大型の貨物船が衝突しまして、橋のほうが大きなダメージを受けて、今本当に大変なことになって、皆さん方をお迎えするバスが通行できないという状況になって、急きょこの山口市へ会場を変更いたしました。

その船会社にばかやろうといってやりたいくらい憤りを感じているところです。しかし、今回は「全国過疎問題シンポジウム2018inやまぐち」にお越しいただきまして本当にありがとうございます。

今日はこの分科会を周防大島町で開くに当たりまして、私たちが昨日の全体会の中で、総務大臣表彰という大変栄えある賞を受けさせていただきました。

そうした中でこれまで取り組んできたことの評価をいただいたと思っているわけですが、大変不十分ではありますが、その評価をさらにこれからの移住定住策、また昨日、藤山先生のお話を聞いて少し安堵したのですが、1%というそのくらいの定住人口、そしてまた社会増を目指していこうということなら、なんとかもう少し頑張れる、実現の可能性があるのではないかという希望を持ったところです。

今日はそれぞれの表彰団体からの発表もあると

思いますが、ぜひとも他の団体の活動を参考にさせていただきながら、みんなでこの過疎問題に十分取り組み、そしてまた何とか解決の兆しを見つけてお帰りいただけたらと思います。

今日のこの分科会がそれぞれの地域にとって大きな過疎問題解決のスタート期になることをご祈念申し上げまして、そして今回は大島に残念ながらお越しいただけませんでしたが、ぜひとも次の機会に大島を訪れていただきたいと思います。私たちもその紹介もさせていただきたいと思いますので、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

過疎地域自立活性化優良事例発表会

過疎地域自立活性化優良事例表彰委員会　副委員長
法政大学現代福祉学部教授

図司 直也氏（ずし　なおや）

1975年愛媛県生まれ。東京大学農学部を卒業し、東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻に学ぶ。2005年に同研究科博士課程を単位取得退学。博士（農学）。財団法人日本農業研究所研究員、法政大学現代福祉学部専任講師、准教授を経て、2016年より現職。（財）地域活性化センター・地域リーダー養成塾主任講師、地域振興・人材育成に関するアドバイザー等を歴任。専門分野は、農山村政策論、地域資源管理論。
主な著書は、『地域サポート人材による農山村再生』（筑波書房）、『内発的農村発展論』（共著：農林統計出版）、「人口減少社会の地域づくり読本』（共著：公職研）、「田園回帰の過去・現在・未来H共著：農山漁村文化協会）、［農山村再生に挑む』（共著：岩波書店）など。

皆さんおはようございます。先ほど町長からもご挨拶いただきましたが、このたびの船舶事故は、まさしく人災だと思いますが、周防大島町の皆さんが大変な状況におかれていますことにお見舞いを申し上げるとともに、早く、まずは水だと思いますが、水と橋がいち早く原状復帰されますことを願っております。

それに加えて今年は気象変動が激しい年だったと思いますが、西日本においても豪雨災害で、中国地方を中心に各地で被害が出ています。まだ復旧さなかというところも数多くあると思いますが、その点も含めてお見舞いを申し上げたいと思います。

さて、今回表彰を受けられた代表の方がここに集まられて、3ヵ所が中国地方からということで、災害なり大変なところもありながらも、昨日の藤山先生の話ではないですが、特に県境域、山間部、離島においてこのような活発な地域づくりの動きがあるということは非常に勇気づけられるところだろうと思います。

私自身、今回この分科会のコーディネーターをさせていただく経緯も、表彰事例団体選考委員の役を受けているということもありまして、もう一方で宮口先生があたられていまして、こちらのほうは私が仰せつかりました。

今回4団体が登壇されますが、そのうち島田市の企業組合くればさんと三次市の青河自治振興会さんには私も足を運ばせていただきました。

また、美作市の梶並の皆さんのところにもこれ以前に何回か足を運ばせていただいておりますし、周防大島は、近くまではお伺いさせていただいたことがあり、私は出身が愛媛の松山ということもありまして、瀬戸内を挟んで向かい側にある島という意味で身近に感じていたところであります。

今回テーマが田園回帰ということで、昨日の全体会で藤山先生の基調講演をスタートに、パネルディスカッションも行われましたが、昨日の段階ではあまり具体的な中身の話はされなかったと思います。むしろ総論といいますか、大きなとらえ方のところに議論が集中して展開したのではないかと思います。

その意味では今日の4団体の皆さんのところはまさに昨日の話をどのように現場で実践されているのか、いずれも移住者の方を呼び込んでいる地域です。おそらくその下地にある地域の皆さんの地道な取組。これはかなり時間をかけてされているというところも4つの地域の共通点だろうと思います。その点をぜひ意識して、まずご報告をお聞きいただきたいと思います。15分ずつということで限られますが、聞き足りないところは皆さん自身で現場に足をお運びいただいて、それこそ地域に活動していらっしゃる人がたくさんいらっしゃいますので、そういう皆さんと交流していただきたいと思います。

4地域にお話しいただいたあとで30分程度になろうかと思いますが、意見交換の時間がありますので、そこで共通点あるいはそれぞれの特徴を私のほうからお話を伺いながらやりとりさせていただこうと思います。せっかく多くの方にお越しいただいていますので、できるだけご質問をいただく時間を取りたいと思います。

それでは、長くなりましたが、最初の事例発表に移りたいと思います。最初の事例発表は総務大臣賞を受賞されました周防大島町からお願いしたいと思います。「周防大島には理想の島暮らしがある「ひと」や「しごと」の流れを「定住」に繋げる」というテーマでお話いただきます。よろしくお願いいたします。

周防大島町（山口県周防大島町）

周防大島には理想の「島暮らし」がある ～「ひと」や「しごと」の流れを「定住」に繋げる！～

椎木／周防大島町長の椎木でございます。今、図司先生のほうからお話がありましたように、「周防大島には理想の島暮らしがある　～ひとやしごとの流れを定住に繋げる～」ということで発表させていただきたいと思いますが、まさに人の流れをまず作る、その人の流れを定住に繋げていくというのが私たちの取組の大きな流れです。

そういうところをポイントに見ていただければと思います。昨日の資料の中にありましたこの優良事例表彰の11・12ページに周防大島町のことが文章で出ていますので、また見ていただけたらと思いますが、今日は文章とかではなくてできるだけ映像で、きれいな写真で見ていただけたらと思いますので、よろしくお願いいたします。

まずこの周防大島町の概要について少し申し上げたいと思います。山口県の広島県境にあります東のほうの、ここですね。ここが米軍岩国基地、ここが海上自衛隊岩国基地、さらに民間の、東京便が1日5便、沖縄便もあります官民共用空港です。ここが広島です。呉、ここが瀬戸内海、そういうふうな位置にあります。面積は138平方キロメートルで、瀬戸内海では淡路島、小豆島に次いで3番目に大きな島ですが、さて知名度となるとそこまでいっていないというのが実情です。

これが今、話題になっている大島大橋です。昭和51年にかかって、すでに43年が経過しました。平成8年6月から無料になりまして、半島のような状況になっているところです。たいへんきれいな橋ですが、モスグリーンがブルーの空によく映えます。

これが近くで撮ったものですが、ちょうど今船が通っていますが、この船と海との差が30メートルなのですが、40メートルあるクレーンを付けた船が通って、がっつりやられまして、今は2トン車しか、要するに普通車しか通れません。

これまでいろいろ想定外ということは経験しましたが、今回のこれはまさに想定外で、不適切用語かもしれませんが、本当にこの船会社や船長に、ばかやろうといってやりたい気持ちでいっぱいです。

町民の、たくさんの皆さん方の気持ちを代弁して

いるということでお許しいただきたいと思います。過疎地といいながら、東京から周防大島までのアクセスは大変よくなっています。岩国空港と羽田空港のあいだは1時間40分です。その岩国まで橋からだいたい1時間くらいで行きますので、日帰りも十分可能で、1日5便の飛行機があると、私が出張しましても帰って来いということになって、非常に厳しい、体力を消耗すると思います。これまではJRで、広島・東京間が約4時間ということです。

2004年の10月に周防大島町は島内の4つの町が合併して誕生しました。よく合併して市になるところがありますが、残念ながら4つが合併しても町のままだということです。

これが周防大島町の619メートルの山の頂上から見た風景ですが、ちょっとご説明しますが、入道雲がある、ここから島が見えますが、ここが松山です。そしてずーっと佐多岬があって、ここは大分です。ここが本来大型の船が通る航路なのです。それを島の北を回ろうとして何とも意味のわからない事件が起きてしまいました。

このように大変風光明媚なところです。これは大島大橋を渡った突き当りに、周防大島を表すサインがあります。高さ3メートル、幅12メートル、3,000個のLEDが中に組み込まれていて皆さん方を歓迎する、夜間にのみこの色が出るわけです。LEDですからいろいろな色が出ます。これを、皆さん方を歓迎していると受け取っていただきたいと思います。

大島の産業はやはり農業が中心ですが、周防大島みかんは山口県の生産量の80%を生産して、潮風を受けて大変おいしい品質のいいみかんが生産されています。これがたわわに実ったみかん畑です。

水産業も大変盛んでして、カタクチイワシから煮干しイリコを作っていますが、これも山口県の生産量の80%を生産しています。

昨日、ジャムズガーデンの松嶋社長にも出ていただきましたが、彼は11年前に移住してきました。彼は私の同級生の娘さんのだんなさんということで、大変なかよくしていますが、彼が年間170種類、17万個のジャムを作って、作ることも大変だと思いますが、材料も町内のたくさんの柑橘があってできると思いますが、なんといってもその柔軟な売りさばく能力が移住してきた彼の、移住者の力だと感じていまして、彼の人柄や、彼のおかげでたくさんの移住者も来ているという好循環が生まれてきて、彼には本当に感謝しているところです。

これはカタクチイワシを使ったオイルサーディンですが、イワシは地元のものです。しかし、残念ながら、オリーブオイルは地元のものではないんです。今、オリーブオイルを作ろうと苗を配っているのですが、まだオリーブはできていません。

これは町の大きな産業の一つであります観光ということで、夏場の海水浴やマリンスポーツ、キャンプ、たいへんにぎわっています。これは秋口ですが、こんなきれいなところでたくさんの方に訪れていただいています。

大島の歴史について少し申し上げたいと思います。どこも歴史というのはすごくおもしろいものがあると思いますが、大島の歴史について少しご紹介したいと思います。江戸時代は飢饉が続いて人口は増えないということでだいたい2,500万人くらいが都市を除いて住んでいたということですが、この長州というところは毛利輝元が山口から兵庫県までを治めていた大名が関ヶ原で西軍の総大将ということで、結果的に29万石に減らされて、何と米麦の9割が年貢になってしまうということで、人がこれでは食べていけないということでどんどん出て行っ

て大島の人口は流出してしまいました。

少なくなっていましたが130年後、江戸中期に15,000人から105年間のあいだに6万人に増えています。こんなことは日本中どこにもないと思います。全部調べたわけではありませんが、こんなに増えたところはないと思います。

要因はサツマイモが入ってきたおかげです。1730年あたりにサツマイモが入ってきました。米は作っても作っても全部年貢に取られますが、毛利の殿様は、サツマイモは野菜だから年貢はかけないと言ってくれたんです。特区みたいなものですね。そうすると食糧確保ができる。そしてさらに作れば作るほど自分のものになるということで、まず食糧ができる。そして外に流通にかけられるということで経済的な自立も少しずつできてきた。

そうするとどんどん人口が増えた。人口が増えると今度は外に出稼ぎに出る。そして外のお金を大島に持って帰る。要するに島の中で稼いで島の中で使う、島の中で稼いで外に持って行くということがたくさんあるのですが、そうではなくて外で稼いだお金を島に持って帰るということはまさに出稼ぎの原点ではないかと思っています。

これが地方の原点だと私は言っているのですが、外のお金を島に持って帰って大島の中で循環させるということをやっていきたいと思っております。そのように人口が爆発的に増加しますとどんどん島の外に出稼ぎに行く。

特に大工、石工、漁師は優秀な人が出てくる。四国、愛媛県と高知県の境あたりでは長州大工というのが立派な神社等を作っています。下にありますが、大きな神社なら山から木を切りだすことから始めて数年、十数年と住んで、出稼ぎをするというようなこともありました。長州大工の名建築を少し見せたいと思います。こんな神社仏閣をたくさん作っています。この大師堂は芸術品だと言われています。こんな彫り物までやってしまうということになりました。

次は明治18年からのハワイ移民です。なぜ、ハワイという、今と違って全く情報のないところに行くことになったのかといいますと、当時、賃金が1日10銭だった時に、ハワイの1ヶ月の賃金が12.5ドル。1ドル2円ですから25円で30日で割ると1日80銭ということです。

今でも1日1万円の日当に対して8万円の日当をくれるといったらどこでも行ってしまうと思いますが、そういうことで明治27年までの9年間に26回も官約移民が出ています。全国で2万9,000人が渡りました。そのうち山口県が1万400人、そのうち大島から4,000人も渡っています。大島だけではありません。柳井、平生、田布施、上関、岩国などたくさん行っていますが、大島のような小さなところから4,000人も行っています。それから官約移民が終わったあともどんどん出るのですが、トータルで10万5,900人がハワイに渡っています。明治41年までですが、そして昭和元年の記録が残っていますが、海外に6,200人も出ていました。当時の大島の人口が57,000人でしたから、移民・出稼ぎ率が11%。当時の送金額が22万6,300円。今の時価で9億から10億というような歴史が残っています。

外で稼いで大島に持って帰るというのは今でも参考になることではないかと思います。ハワイのこんなところで、サトウキビのプランテーションに入って3年間の契約で働くわけです。すごく過酷な状態だと思いますが、日本人は本当にまじめ、勤勉でこういったところでだんだん地位を築いていきます。すごく過酷な仕事だったと思います。3年間の労働契約がすんだら帰る人もいます。

しかし、そこに住みついて商売を始める。下は行商。上は魚屋さんですが、そのようなことから昭和38年にハワイのカウアイ島と姉妹都市提携を結び、すでに55年の歴史があります。6月22日、協定日ですが、これから8月まで夏はクールビズではなくてハワイビズで、役場の職員、銀行、病院などみんなアロハシャツを正装としています。

人口について、人口は見る影もない。日本の人口は減り始めています。もう8年前から減り始めています。生産年齢人口は23年前から、あと32年後には1億を割り込むというデータが出ています。
周防大島町のピークは私が生まれた昭和22年。64,500人です。今現在は17,000人。本当に見る影も

ありません。あと22年後には8,000人になるのではないかと出ています。これは見ていただいたらわかりますが、1回も増えることなく減り続けているという状況です。

これから過疎対策について申し上げたいと思いますが、私たちは交流を進めていこう。交流人口を増やしていこう。そして交流人口の中からぜひとも定住につなげていきたい。その交流も見るだけではない、体験・体感する交流を進めていこうということです。

観光人口100万人が目標になったのは私が町長になった平成20年です。当時は80万人でしたが、これを何とか100万人にしたいと、軽く考えていたのですがなかなか伸びません。とうとう10年かかりましてようやく100万を達成しました。

そのひとつのきっかけがやはり平成22年からスタートした民泊体験型の修学旅行誘致です。当時は神奈川県の中学校1校でしたが、現在は年間30校、約4,500人が毎年訪れてくれています。累計で2万人の子供たちが大島を体験してくれています。彼らにはいつも「あなたたちは大島のサポーターになってください、PR大使になってください」と言っています。

それから、ハワイとの交流からサタフラ、フラダンスのイベントをやっています。毎年夏のあいだに130組、3,500人もの方が来てくれるようになっています。

体験の写真だけを見せたいと思います。こういう子供たちが修学旅行に来て、体験をするわけです。大変喜んでくれています。彼らは生まれて初めて生のタコをにぎったと。こういうふうに魚釣りをやったり、釣った魚を家族の人と一緒にさばいて食事をするというような。これは修学旅行生を見送る時の風景です。

これはダンスです。これは少し高齢の方々で少し腰が曲がっていますが、こういう方々もたくさん来てくれます。大阪、関西、福岡まで、延べですが120組3,200人の方が7月8月のフライベントに参加してくれます。

そして体感型ということですから、スポーツイベントもどんどんやっていますが、これは2月の第1日曜日と決まっていますが、いちばん極寒の寒い時ですが、大島は天気さえよければ暖かいということでこういうロードレースのスポーツイベント。それからこれは3月に行います、全国から48チームの子供たちを集めてサッカー大会を3日間、延べ168試合をやるというスポーツイベント。そしてこういうきれいなところがありますので、スポーツ合宿も誘致しています。

この交流人口をぜひとも定住につなげていきたいということで定住促進協議会を立ち上げて、やっていることは全国の皆さんと同じだと思いますが、実績を示したいと思います。

定住促進協議会を立ち上げたこの6年間で991件の移住相談がありましてそのうち67家族174人が移住しています。全然不十分だと思いますが、昨日の藤山先生のお話を聞くと、あまり数だけを求めるなということもあったと思います。ぜひとも、大島が好きで大島に定住してずっと大島島民になりたいという方に、移住をしていただきたいという取組をしています。

大島のこれからをお示ししたいと思います。大島は交流人口がだんだん増えてきました。これからの取組として私が考えていますのは、これからの可能性としてはぜひとも瀬戸内のミニクルージングという可能性を探っていきたいと思います。

多島美をヨットで巡るというのはこれは世界に通用するような瀬戸内海で、世界に通用するような観光地になれるのではないかという大きな夢を持っております。こんなきれいなところをヨットで回ると、たぶん外国の人は感動するのではないかと思います。大島は絶景なりといっておりますが、こういう交流人口をぜひ定住につなげていきたいという取組が評価いただいたのだろうと思っています。これをきっかけにしてさらに定住を進めていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

図司／ありがとうございました。おそらく現地でお話いただくようなことも含めて、歴史も含めて細かいところまでお話いただきました。ありがとうござ

いました。

続いて、同じく総務大臣賞を受賞されました静岡県島田市の企業組合くればさんからお話をいただこうと思います。

それでは北島さんから、「ウエルカムささま　～ササマックスプロジェクト～」ということでお話をいただこうと思います。ではよろしくお願いいたします。

企業組合くれば（静岡県島田市）

ウエルカムささま
～ササマックスプロジェクト～

北島／静岡からまいりました。島田市川根町にあります企業組合くればの北島でございます。最初に、今、町長さんからお話がありました、周防大島町の皆様、本当にたいへんでございました。改めてお見舞い申し上げます。1日も早い復旧をお祈りするところでございます。

さて、私たちの活動の拠点、静岡県、ちょうど大井川が県の中央を流れていまして、その中流にあります。皆様のイメージからしますと、南アルプスを水源とする大井川、それからほぼ周年運転していますSL、トーマスも最近運転しています。それからかわね茶というお茶の産地です。ご存じの方もいらっしゃるかなと思います。

私たちの活動は事例集の中の7・8ページにありますので、またあわせてご覧いただければと思います。

私たちの山村は人口400人を切りました。そんな中で、平成に入って同じような形で少子高齢化が進む、過疎化が進むということの中で、将来どうなるのだろうかという思いが住民共通の意識でした。

ただ、その中で安楽死はいやだと。このまま何となく過ごして村が消滅してしまう、若者がどんどん出て行ってしまう、そういったことをただ座して見ているということはやめようということで今回の取組が始まったと承知しています。

時間の関係で、最初に少し、全体の状況、経緯をご説明したいと思います。安楽死はいやだといっても何をどうしたらいいかわからん、というのがスタートのきっかけでした。そうした中でとにかく何でもまずやってみようということ。その「何でもまずやってみよう」ということの中で「なまず屋会」というのを発足させました。

とにかく「できない理由を考えない。どうしたらできるか考えよう」ということからスタートしたのが平成の初めだと思います。それから約30年、試行錯誤、紆余曲折がありました。そうした中で現在の取組につながっていくということです。

その中で、そこにも書いてありますが、4つばかり大きな節目になることがあったと承知しています。ひとつは地元に昭和30年まで村だったのですが、ひとつの自治体がありました。小学校、中学校、役場等もありましたが、だんだん子供たちの数も減っていくということで廃校になりました。その廃校を踏まえて体験、交流、宿泊施設、山村都市交流センターというのを開設しました。そこで交流センターささまの運営の中で笹間の国際陶芸祭というのを開催し、それが現在の活動の具体的な大きな取組のきっかけとなったということで、空き家の利用促進やアーティストインレジデンス、観光グループの発足などにつながっていったということが最近までの話です。

さらにもう1歩進めようということで、新しいプロジェクトをスタートさせたということがこの30年の主な全体の取組です。時間の関係もありますが、若干一つひとつご説明させていただきます。

最初に申し上げましたように、平成の初期に「なまず屋会」なるものをやってみようということでスタートさせました。何をしていいかわからんということの中で、私たちの島田市は県庁所在地静岡市から少し離れたところにあるのですが、そこに行って村の取組を広めようということで、平成初期に5年続けてまちに行って、お茶やシイタケの販売をしました。「こんなものが売れるかどうかわからんよ」と言っていたのですが、県庁の裏に誰でも使えるスペースがありましてそこで販売したのですが、1

日の売り上げが1万とか1万5,000円とか現金が手に入ったのです。「これはちょっと、初めてのことだよ」ということで、そのお金はきっと帰りに1杯飲んで使ってしまったと思いますが、それをきっかけにいろいろな取組、川の水質検査や山村留学、地域の特産を活かした取組に目が向けられたというようなことです。

それと並行して、先ほど申し上げましたが廃校ということが現実になってきました。私もそこの出身ですが、私が小学生のころは同級生が40人くらいおりました。ところが平成の19年、20年、これが廃校になった時の全校生徒9人の子供たちの写真です。12年ごろから学校を存続させるにはどうしたらいいのだろうかということをいろいろ検討しました。あわせて、これは陰の方で廃校になった時にその施設をどういう使い方をするのだろうかということを住民のあいだであわせて検討しました。

廃校利用ということで視察に来られるところが結構ありますが、「廃校になった、どうしよう」ではなくて、「廃校になる、学校存続」という命題を続けながらあわせて廃校という現実を踏まえてどういう形で地域を活性化していくかということも検討したことがよかったかなと思っています。

そして「山村都市交流センターささま」ということで開設しました。体験交流宿泊施設、これは市のほうで整備していただきました。ちょうどそのころ、合併という現実がありまして、編入学園ということで、小さな村にも合併のおみやげをやらないといけないだろうというご配慮がありまして作っていただきました。

その中でひとつは受け皿のことがあります。私たちは企業組合、中小企業と協同組合法の中にあります企業組合という法人格を持った組織を選択しました。よくいうNPOももちろん結構ですが、収益事業をNPOの主な目的にすることができないということはご承知だと思いますが、そういうことでなく、少し収益的な、経済的な波及効果を目標にしようと。ですから将来は組合員、関係者に配当ができるくらいの目的をもった組織にしようということで、企業組合という形を選択し法人を設立したということです。

企業組合はどこの県にもありますが、中小企業団体中央会というのがありまして、大変なご支援をいただいて、現在も活動を続けているということで、法人格を持った企業組合にしたのは正解だったかなと思っています。

そうした活動の中で遊休農地の利用や特産物の販売、隣接するキャンプ場の運営というようなことを続けていますし、あわせて多くの方々に来ていただこうといろいろな体験メニュー、このピザも、窯も全部手作りです。

それからこれは定番ですが、流しそうめんやヤマメのつかみどりなど、どこでもやっています体験メニューを揃えてできるだけ多くの方々に来ていただこうと。

それからイベント、夏祭りもやろうということで進めています。そうした中で申し上げたいのはここにある「ささま国際陶芸祭」というのを平成23年、2011年からスタートさせたということです。

陶芸については私たちは全くの白紙でした。そうした中で体験でお呼びした陶芸作家の方、私たちは知らなかったのですが非常にメジャーな作家の方に来ていただいて、陶芸教室をしていただいたのですが、「ささまが気にいった。私の人脈で世界の陶芸作家に声をかけたらきっと来てくれるだろう」とお話がありまして、地元の人たちに交流会の中で「俺が連れてきたら、やるか?」という話をしましたら、みんなお酒が入っていたので「やるよ!」と。半年たって、「招待作家を10人決めてきたから準備しろ」というお話がありました。

地域としてはそういった国際的な催しはもちろん、大きなイベントの経験もまったくなかったのですが、冒頭申し上げたように、できない理由を探さない、話さないという基本的な精神の中で「よし、やろう!」ということでスタートしました。

当時は大きな災害もありましたし、地域に通じる道路も通れなくなるということがありましたが、その後、25、27、29年と1年おきに多くの陶芸作家を招いて実施しています。昨年29年には招待作家は8人くらいですが、自主参加、自分で参加費も旅費も

払って来る外国人作家の方、17ヶ国65人の方々に来ていただきました。国内からは3,000人、4,000人を超す方々に来ていただきました。29年、人数が減っていますが、これまで行政に補助金をお願いしてきたのですが、少し自立というようなことで入場料をいただこうという形で4回目から入場料をいただいて実施したということで少し参加者が減っていますが、3,200人の方に来ていただきました。

特徴は、地域ぐるみで対応するということ。先ほども言いましたように、交流センターだけでなく、実行委員会だけでなく、食事の提供や民泊、いろいろなイベント、そうしたものについても地域ぐるみで対応しようということでスタートしました。来年の5回目に向けて準備を進めているところです。

この国際陶芸祭が大きな地域の活性化、自立ということではインパクトを与えた。たとえば農業後継者、若干いますが、そうした後継者がお茶以外、ブルーベリーやブドウといった新しい品種の栽培も進めているといったことや、アーティストインレジデンスといったことで、フランスから若い女性が笹間にずっと滞在しています。彼女は私たちの企業組合くれば、交流センターの職員という形で採用して陶芸の勉強をしながら英語教室や料理教室、村の人たちの交流部というような形で活動を進めている。開催にあたっての通訳なども含めて活動していただいています。

というようなことで、新しい加工グループが2つ、昨年、一昨年、誕生しました。左のほうは「ひなたぼっこ」という平均年齢70歳以上のお母さん方が加工施設を立ち上げたということですし、右の方はと「母屋（かかや）」ということで、これも平均年齢、たぶん60歳以下だと思いますが、そういった方々がこうしたグループを立ち上げて、お見えになる方々の食事や交流、イベントに参加していただけるというようなことで進めています。

こうしたことで頑張って地域を少しでも元気を出そう、自立を促進しようというような形で進んでいるわけですが、今回4回目が終わりました。5回目の国際陶芸祭を迎えるにあたって、地域としても少し新しいプロジェクトをスタートさせようということで今準備を進めています。今年からスタートすることになっています。その名前は「わびさびれっじ」。わびさびというのは日本のわびさびということですが、それとビレッジをかけまして「わびさびれっじ」というプロジェクトをスタートさせて、今月から具体的な取組をスタートさせました。多くの方に来ていただいているのですが、その方々に対して特別のしつらいやおもてなしをするのではなくて、私たちの日常的な暮らしといったようなものを体感していただく。

それは4回を通じてアンケートを取ってご意見をいただいたんですが、この地域は本物の日本の暮らしがあるとか、地域の人とのコミュニケーションであるとか、安全安心で美しい環境がある、これはやっぱり日本に来ていただいて日本の生活、日本の環境、そういったものを体感するのがいちばん魅力だよというようなことを異口同音に多くの方に言っていただきました。そういった形で専門家のご意見もいただきながら、そのところをもっと強調しておもてに出していこうということで、わびさびれっじというプロジェクトをスタートさせました。いずれにしてもそうした廃校、交流センター発足、いろいろなイベント、イベントの中での国際陶芸祭の実施、その波及効果、それからこうした新しいプロジェクトというような形で次々に、何らかの形でこれまでのことを踏まえて新しい挑戦をしていきたいと考えています。

多くの課題もあります。後継者問題、基幹産業であるお茶、林業の厳しさ、それはずっと変わって

いませんが、少しでもそうした中で住民の方々を中心に、移住者の方々も一緒に明日の希望を持てる地域にして、学校教育法の学校は再建できませんが、子供たちの元気な声が聞こえて、地域全体が元気になるというような形でこういった我々の会員も頑張っていこうと思っています。そういった意味で今回受賞させていただいたことが大きな地域の励みになると考えています。これからもぜひよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

図司／ありがとうございました。私も現場にお伺いしましたが、中国地方の皆さんからするとおそらく、こんなところに集落があるのかというような、むしろ山村に近い、本当に険しいV字谷のところに集落が点在しているようなところです。中国地方の中山間のほうが比較的開けている里山の景観が広がっていると思うのですが、そういうところからするとおそらく日が当たる時間もそんなに長くない、違う場所柄ですので、ぜひ一度足を運んでいただきたいと思います。

それでは続いて、広島県三次市の青河自治振興会の伊藤さんからお話をいただきます。伊藤さんは、移住者の立場ですが、こういったところでご発表いただける関係ができているということです。「こころ　あたたまるふるさと　あおが　～持続的な住民主体のまちづくりへの挑戦～」ということでお話いただきます。よろしくお願いします。

青河自治振興会（広島県三次市）

「こころ　あたたまるふるさと　あおが」
～持続的な住民主体のまちづくりへの挑戦～

伊藤／皆さん、おはようございます。私は広島県北部、三次市の青河町というところからまいりました。今日はよろしくお願いします。青河町は平成16年に1市7町村で合併した三次市の19住民自治組織の中でいちばん小さな町です。

しかし、高齢者から子どもたちまで住みよい町と言ってくれています。なぜそういってもらえるのか、先人の思いを受け継いできた自然豊かな中で育まれた町民のあたたかい心、熱い思いのつまった活動を紹介します。

まず、地域の成り立ちと方向性についてお話いたします。平成16年の合併と同時に青河自治振興会となりました。今できている活動は昔から受け継がれている自分たちのことは自分たちで何とかしようという背景があったからだと確信しています。

それらの思いを形にし、これから取り組むべきまちの方向性を定めたのが平成16年に策定した青河ビジョンです。このビジョンに基づいて地域全体で考え、支え合いに取り組んでいます。

その中でも我が地域と切り離すことができないのが農を中心としたまちづくりです。農業を守ることは地域を守ること。農業があるから青河町に住む意味があります。地域を継続していくためには楽しめる農業を見出しながら、その楽しさを都市等の外部に発信することの大切さを考えました。

ここでは過疎地域を存続させる手法と考え方についてお話します。まず、農業は大変なものではなく、楽しいものだと子どもたちに伝えています。もみまき、田植え、稲刈りを繰り返し体験し、特に高学年になると田植え機やコンバインで作業をさせてもらい、とても楽しいと喜んでいます。都市との交流では、近年では高齢化し、イモの苗植えや収穫作業が難しくなり、今年度から交流のあり方を検討することになりました。

ここからは地域のユニークな朝市の話をします。家庭の余剰野菜を都市部に出すだけでは処理できず、季節によっては多くが畑に捨てられ、害獣のえさになってしまうため、何とかならないかと平成25年から住民グループで朝市「よりんさい屋」を立ち上げました。

出荷は町内の誰でもできます。運営費は朝市に1万円の出資をし、無給で店番をします。売り上げは少額ですが、年間200万円前後で推移していきそうです。ここにも子どもたちが関わっており、看板やチラシなどを作ってくれます。店番をする人の利益は人との交流ができること。年に1度の食事懇親会が